世界の中の日本研究 ―批判的提言を求めて―
オーストラリアの側面から

バーバラ・ハートリー

この 40 年、オーストラリアではアジアの国々の言語や文化を勉強しようという若者が年々増加しており、その現象の最も早い段階に始まったのが日本語であり日本研究であるといえよう。現在、ほとんどのオーストラリア人が、親戚が日本で働いた経験があるとか、知人の配偶者が日本人であるなどというように、日本となんらかの関係を持っている。最近は、特に中国語教育が盛んになってきているが、それでも日本語を勉強したい、日本に行きたい、日本で就職したい、という考える若者はまだ相当数存在する。このような傾向は、20 世紀の最後の 30 年のことと思われがちであるが、日本研究自体の歴史は少なくとも一世紀にわたる。本稿では、オーストラリアにおける日本研究と日本語教育の歴史の概要とそこに携わってきた人物の功績について紹介する。

はじめに、オーストラリアでの日本研究の黎明期を支えた人物から、現代に活躍する研究者たちについて説明する。また、彼らが活躍した時代の社会事情を踏まえながら、オーストラリア連邦政府の政策が日本研究にどのような影響を及ぼしてきたかということを考察する。つぎに、オーストラリアで日本を研究している研究者はどのような問題に立ち向かうのか、またその問題にはどのような原因があるのか、どのように解決できるのか、という問いを通して、現在の日本研究の状況について考察する。最後に、オーストラリアからの側面だけではなく、グローバルな視点から見て、日本研究はいかに発展すればいいのか、またいかなる形で国際社会に貢献できるのか、といった点について提言を試みる。

オーストラリアにおける日本研究の幕開け

オーストラリアにおける日本研究および言語教育の幕開けは、シドニー大学で「東洋研究学科」が創立された 1917 年に遡る。学科長に任命されたのは、日本で英語教師として、また政府のアドバイザーとしても働いた経験を持つジェームズ・マードックだった。彼の大著 *History of Japan* は、はじめて英語で書かれた日本の総合歴史書として有名である。また、夏目漱石の先生であったことでも知られ、漱石によると、マードックはかなり奔放で自由な雰囲気を持っており、日本人の学生から大変尊敬されていたそうだ。スコットランド人のマードックをシドニー大学の教授として招聘したのは、オーストラリア連邦政府国防省であった。これは、当時のオーストラリアが、1905 年に日露戦争に勝利したアジアの小国日本を安全保障上の脅威とみなし、その国を知るための研究の必要性を感じていたからである。しかし、マードックにはそのような考えはなく、1918 年のシドニー大学教授就任記念講演では、オーストラリアにおける日本研究は、安全保

障面や物質面だけでなく、文化的な側面にも重点をおく必要がある、と述べている。この政府とマードックの意見の相違は、一世紀も前のこととはいえ、現代の問題に充分に通じるものがある。つまり、学者の研究の目的と学者の研究に対する政府の期待との間には常に大きな溝が存在している、ということである。

当時のオーストラリア政府の日本への視点は、現代のオーストラリア政府のアジア全体への視点にもみることができよう。この視点のもとになっているのは、白人最優先主義である。オーストラリアでは、1890 年代から、アジアの国々を「脅威」とみなす偏見が根強く存在する。20 世紀前半には帝国日本を敵視し、ベトナム戦争の時には北ベトナムを支えた中国を野蛮とみなし、1970 年代から 1980 年代には軍事政権の支配するインドネシアを警戒し、現在は経済発展の著しい中国を牽制している。

むろん、いつの時代も、アジア人に対する偏見を持たず、白人最優先主義に反対し、政府とは見解を異にするオーストラリア市民は存在している。[1] しかし、オーストラリアでは保守である「自由党」（Liberal Party of Australia）もしくはもう少し左翼的な態度をとる「労働党」(Australian Labor Party) いずれの政権下でも、排他主義的な見解が広く支持されるという傾向があるのは否めない。これには以下のような背景がある。自由党支持者には、かつての「偉大なる帝国」であり「母なる土地」であるイギリスとの伝統的な関係を保守しようとするモナキストが多い。一方、労働党支持者は共和主義を重んじるが、組合運動の中にも、オーストラリア人労働者が、より安い労働力として雇われていたアジアからの移民労働者を排除しようとしていた時代もある。また、1975 年に、インドネシア軍人がオーストラリア人記者 5 名を殺害するという事件が起きた際は、オーストラリア政府のインドネシア政府に対する峻烈な批判に煽られ、強烈な敵意を持って人種差別的な態度をあらわにする市民も少なくなかった。現在ではほとんど聞かれない言葉であるが、「黄禍」（yellow peril）という奇妙な差別表現も、当時は日常的に折りにふれ語られていた。[2]

シドニー大学の東洋研究学科が開設された 2 年後の 1919 年、メルボルン大学では正式なアジア研究学科は設立されなかったが、一科目として日本語が導入された。当時は、英国のエリートの教育制度の影響で、古代ギリシャ語とラテン語がオーストラリアにおける第二外国語教育であるという意識があったため、メルボルン大学にアジア言語を導入することは、画期的な異例であると同時に困難をきわめた。1922 年、日本語教育導

[1] 白人最優先主義が横行していた時代のオーストラリアは、白人ではない人々に対して様々な排他主義政策が実施されていた。このいわゆる「白豪主義」に従って、1901 年の移住制限法から 1973 年の移民法まで、非アングロ･サクソン系の人々は、移民として受け入れられることがほとんどなかった。アボリジニに対する差別も、むろん白豪主義によって正当化されていた。むろん、白人のオーストラリア市民の中には、このような人種差別に反対し、活動していた人々も多く存在していたことは忘れてはならない。

[2] ロシアの無政府主義者ミハイル・バクーニン（1814–1876）がはじめて説き（Chen 2014、51）日清戦争後ドイツ皇帝ウィルヘルム二世（1859–1941）によって広められた考え方。黄色人種の勢いが盛んになって、他人種、特に白人人種に及ぼすという災禍のこと。

入から3年後たってようやく、大学唯一の日本人講師として、稲垣蒙志が選任された。戦時中のオーストラリアにおける日本人被抑留者の事情を研究している永田百合子の論文を読むと、稲垣の人生がいかに苦難に満ちていたかがよくわかる。稲垣は、真珠湾攻撃が起こってから、敵国である日本の人間として抑留されていた。その間、夫の帰りを待っていたオーストラリア人妻のローズは病をえて死んでしまう。戦後、稲垣はひとり日本に引き揚げたが、オーストラリアに戻ってくることはできなかったと思われる。[3]

シドニー大学に話を戻すと、東洋研究学科では、中国語やヘブライ語教育も始める予定があったが、1921年にマードックが逝去したために、その計画は頓挫してしまった。『オーストラリア語学教育の可能性を開く— 鍵となる九つの言語』*Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia*（1994年）によると、マードックの後継者としてアーサー・リンゼイ・サドラー教授が学科長になったあとも、教員の数が限られており、研究業績も比較的に少ない状況が1960年代まで続いた。

戦後から現代へ

戦争中に中断されていた日本研究は、1956年に、貿易大臣のジャック・マキュウアンが「日本とオーストラリアはともにアジアの縁に孤立している二つの国だ（Japan and Australia are two lonely countries on the edge of Asia）」（Patience 2010）と発言したこともあり、両国の貿易関係が1950年代の半ばあたりまでには改善され、それにあわせて、オーストラリアの戦後行政当局が日本研究の必要性を認識するようになった。

1950年代から1960年代にかけて、オーストラリアの日本研究者たちは、文学の専門家が大多数を占めていた。この時代で特に傑出している研究者は、ジョイス・アクロイドであろう。彼女は「強い」女性として知られ、1965年のクイーンズランド大学の日本語・日本文学学科の創立時には、学科長に就任した。当時、オーストラリアに3人しかいない女性教授の一人だった。ニューカッスルの生まれで、ケンブリッジ大学で日本文学博士号を受けたアクロイドは、研究分野の幅がひろく、古典のみならず近現代文学も研究した学者として知られている。1979年に『折りたく柴の記』の英訳も出版した。

1990年代になると、ロイヤル・タイラーがオーストラリアの日本研究を牽引した。マードックと同様に英国出身の学者である。オーストラリア国立大学の教授として政府から六年間の研究助成を受けて英訳した『源氏物語』を2002年に出版し、英語による日本研究と学会に大きな影響を与えた。ここで注目すべきは、オーストラリア政府の研究助成金が、『源氏物語』の英訳というプロジェクトに支払われたということである。また、1979年に出版されたアクロイドの『折りたく柴の記』の英訳も、1990年代の政府の研

[3] 遠藤正敬は『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍—満洲・朝鮮・台湾』のなかで、帝国時代の日本政府によって、いかに「外地人」が扱われていたかを論じているが、「外地人」の扱われ方とオーストラリアにおける被抑留者（日本人のほかに、ドイツ人とイタリア人も含む）の扱われ方との間には多くの共通点がみられる。

究助成に支えられたタイラーの『源氏物語』の英訳も当時の古典文学、英訳に対する公的な研究助成が潤沢であった証拠で、古典文学研究の成果が多く挙がった。ところが、この2、30年のうちに、文学翻訳は政府に研究として認識されなくなり、研究費が支給されることは稀になった。（近年は、人文学研究さえも政府から軽視され、研究費を確保するのが困難な状況にある。）このように翻訳の重要性を軽視する傾向は、グローバルな規模における異文化の理解やその循環の停滞を招き、オーストラリアにおける学術研究の発展の妨げの要因となっている。

世界中の大学にみられるように、オーストラリアの大学でも教員数の縮小が盛んに行なわれている。そのあおりをうけて、日本の古典文学を読む授業を開講する教員の数も減少の一途をたどっている。かつては、初級・中級者対象の古典研究のクラスもあり、学生はより難しいレベルの日本語に触れ、幅広い文学の知識を身につけることができた。このようなすばらしい機会を、いまの若者たちは失ってしまっているのである。古語の知識なしでは、中世の文章も帝国時代の日本の書物も読解することができない。日本に留学するチャンスでもない限り、オーストラリア人学生が古典の勉強をすることは不可能になってしまった。

第二外国語教育の研究者のジョー・ロビアンコによると、1980年代半ばから1990年代半ばまではいわゆる「日本語教育の津波」に覆われる時代であった。当時オーストラリアでは「日本語ができれば、経済が強い国の日本で仕事ができ、お金が儲けられる」といった偏った考えを持っていた人が多かった。日本の不況が続く現代でも、学士過程では、日本語を勉強している学生の人数は増えてはいる。しかし、新自由主義の隆盛とともに、修士および博士課程の学生にたいする公的支援が縮小したことで、日本研究者になるために大学院に進もうという学生は減少の一途をたどっている。大学院生の人数は、大学の研究が成功しているか否かを図るリトマス試験紙である、とはよく言われることだ。現代オーストラリアの日本研究は、停滞とまではいかなくとも、積極的に拡大しているともいえない。大学院生の研究内容は、従来型の日本文学や歴史などのいわゆるハイ・カルチャーだけでなく、音楽、演歌、現代織物産業、建築学にまつわるサブ・カルチャーやポップ・カルチャーについてもみられるようになったことは特筆すべき点である。

女性の大学教員が今よりも少なかったアクロイドの時代以降、1960年代の第二波フェミニズムの影響もあってか、1980年代の後半からは、女性研究者による研究結果が増え始め、学界に意義のあるインパクトを与えるようになった。特に、ジェンダー批評を研究に導入する女性研究者の影響によってオーストラリアの日本研究の幅はより広がったと言える。1990年代の終わりまでには、男性の政治学者のアラン・リックスや文学研究者のヒュー・クラクとともに、フェミニズム評論をよく参照した女性の歴史学者のテッサ・モリス＝スズキとヴェラ・マッキーの研究も衆目されるようになった。また、大学院生の中にもフェミニズム批評の立場から研究する女性大学院生も多くなった。特に、マッキーの著書 *Creating Socialist Women in Japan*（2002年『日本における社会主義の女性

たち』）は、日本における女性解放主義の運動についての詳細な研究として高く評価された。日本の学界でも有名なモリス＝スズキは、少数民族の研究を精力的に促進している。彼女のもとには世界中からマイノリティ研究を目指す大学院生が集まってくる。モリス＝スズキもマッキーも慰安婦問題研究の先駆者でもある。現在、若い世代の研究者が重要な成果を挙げているのも、彼女たちが作った基盤があってこそ、と言えよう。

オーストラリアでの日本研究の今

これまで述べてきたように、オーストラリアの日本研究は、将来に向けて超えなければならない問題が山積している。しかし、この国には、問題に立ち向かっていけるだけの力を十分に持った研究組織や機関が存在しているのも確かである。例えば、Japanese Studies Association of Australia（JSAA、オーストラリア日本研究学会）は 、南半球で最大の日本研究学会であり、研究者の活動的かつ学際的な交流の場として、国際的に周知されている。活動内容も多岐にわたっている。隔年で行なわれる国際学会には、世界中から参加者が集まる。学会誌 *Japanese Studies* は、オーストラリアの日本研究者によって編集される最も「健全」かつ有益な研究成果として、国際的に高い評価を得ている。政府の助成金が減少しているといえ、オーストラリアには日本研究を積極的に支援する公的機関がいくつか存在する。オーストラリア国立図書館の日本研究グラントや国際交流基金の日本研究フェロー制度はその最たるものである。研究助成の対象者のみならず、機関への訪問やメールでの問い合わせをする者に対しても、オーストラリア国立図書館のアジア部や国際交流基金のシドニー事務所のスタッフのサポートは手厚い。彼らの働きもまたオーストラリアでの日本研究の健全さを示しているものである。

前述したように、1970 年代まで日本研究は歴史と文学が中心だった。しかし、日本が経済大国として浮上すると、経済学を専攻する学生が日本語や日本社会や文化を学ぶクラスを受講するというケースも多かった。しかし、大学のリストラが進んだ 1990 年代以降からは、歴史や文学といった伝統的な研究分野が学生の興味をかき立てなくなった。また、日本語初級や中級レベルのクラスの数には変わりがなくても、上級日本語や日本文化の講義を受講する学生は確実に減少している。以前には、10 人以下の少人数のクラスも容認されていたが、2000 年代に入ってからは、クラスの最低開講人数が高く設定されたため、多くの日本語学科が生き残りをかけて、従来の伝統的な分野よりも、漫画やアニメのようなポップ・カルチャー的分野を導入するなど授業内容を変更している。

また、オーストラリアが抱える「距離の専制（Tyranny of distance）」の問題もある。多民族社会と思われても、オーストラリアは、日本と同様、他国から海で隔たれた「島国」であるといえよう。国を出て異国で長期間暮らすのは経済的に厳しく、日本で十分に費用も時間もかけることのできる研究を行うことは容易ではない。公的助成の減少とともに、大学のサバティカル休暇制度の取得も難しくなっており、研究のための資金も時間

も確保できない研究者が増加している。日本に来るチャンスが少ない研究者は、高い日本語能力を維持することが困難であるという問題もある。[4]

将来に向けて

一般的に、日本研究は「地域研究」のひとつであるとみなされることが多い。しかし、地域研究は帝国主義的かつ冷戦主義的な視点を内包しているという批判がある。そこで、モリス＝スズキや酒井直樹らが「トランスナショナル研究」というモデルを推奨しているが、近い将来、日本研究も視点が閉鎖的であるという批判を受けがちな「地域研究」から「日本」という概念を包括的に問題化できる「トランスナショナル研究」に変換する必要があるのではないだろうか。そうしてはじめて、価値ある業績を残していくことが可能になるのではないだろうか。この「トランスナショナル研究」は、もともとモリス＝スズキと酒井が独自に作り出したモデルというわけではなく、スチュアート・ホールがその研究で提示したモデルであった。ジャマイカ出身のホールは、白人に支配されたイギリスの学界の「他者」として、カルチュラル・スタディーズにおける代表的理論家であり、いわばカリスマとして多くの学者に影響を与えた。しかし、トランスナショナル研究のモデルにも、中心と周縁という二項対立にからめとられている部分があるのは確かである。ポストコロニアル研究のガヤトリ・スピヴァクが常々言っているように、二項対立の脱却の不可能性を承知の上で、私たち研究者は、出来うる限りの表象の道を模索しなければならない。

その不可能性に挑戦した研究として、*On the Western Edge: Comparisons of Australia and Japan*（2007 年、『西洋の果てで―オーストラリアと日本の比較研究』）という小さなエッセー集を紹介したい。Comparisons of Australia and Japan（オーストラリアと日本の比較研究）という題名には、少し古臭い「比較文化」の印象も受けずにいられないが、この本の中には非常に研究的価値がある章が多い。特に、オーストラリア国立大学でアボリジニ研究をしていた保苅実の論文には目を見張るものがある。博士論文の完成の前にガンで死去した保苅の研究には、本人が提唱した Points of connectivity という概念がある（Hokari 2007）。アボリジニ研究をしていた保苅は、大学の友人たちに、マイノリティ研究をするなら、日本の少数民族研究の第一人者であるモリス＝スズキに会うようにと、なんども勧められたが、はじめは固く拒否していたという。日本研究とアボリジニ研究の間には何の関連性もないと考えていたのである。しかし、実際にモリス＝スズキに会ってか

[4] 日本語を母国語としない日本研究者には、どの程度の日本語能力が必要なのだろうか。1970 年代以前は、日本に留学し、言語能力を上達させるチャンスがあった大学生は少なかった。研究者のなかでも、ヨーロッパ中心主義的な視点が横行し、日本語で書いてある研究資料などをまったく参考にしない者も存在していた。現在では、完璧な日本語ができない者には、日本研究をする資格がないとさえ思う研究者がいる。しかし、この考えは、以前の「外人には日本語ができない」といった日本人論的な考え方と表裏一体といえ、柔軟でないという点において共通しているといえよう。

ら、両者の研究の間に、いわゆる共通点（common points）ではなく、よりよい包括的で柔軟な関連性 Points of connectivity があったことに気づいたというのである。つまり、全然違う分野でも、同じような包括的目的、問題の原因があり、学者同士の意見交換で、自分の研究分野をより理解できるということに気づいたのである。保苅のように、日本研究者も、日本研究という枠から積極的にはみ出し、様々に異なる分野の研究者と意見を交換したり、共同研究したりすることが、これからは必要なのではないだろうか。このような学際的な実践によってこそ、現代のグローバル社会に有益な研究成果を挙げることができるのではないだろうか。

参考文献

遠藤正敬『戸籍と国籍の近現代史 民族・血統・日本人』明石書店、2013 年。

島津拓『オーストラリアの日本語教育と日本の対オーストラリア日本語普及―その「政策」の戦間期における動向』ひつじ書房、2004 年。http://www2.gensha.hit-u.ac.jp/theses-archive/theses/3a.pdf

Chen, An, *The Voice from China: An Chen on International Economic Law*, Heidelberg: Springer, 2013.

Hokari, Minoru, "Lest We Remember: The Future of the Past in Japan and Australia," in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 23–34.

Lo Bianco, Joseph, "After the Tsunami, Some Dilemmas: Japanese Language Education in Multicultural Australia," *Australian Language Matters*, January/February/March 2000, p. 1 continued on pp. 10–13.

Marriot, Helen, *Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia. Volume 7: Japanese*, Canberra: National Languages and Literacy Institute of Australia, 1994.

Nagata, Yuriko, *Unwanted Aliens: Japanese Internment in Australia*, St Lucia, Qld.: University of Queensland Press, 1996.

Patience, Allen, "Two Lonely Countries on the Edge of Asia: Australia and Japan," in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 85–102.

Tada, Masayo and Leigh Dale (eds), *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia*, Perth: Network Books, 2007.